

この部屋から、旅に出よう。

Vol.7

Platform

あなたの
喫茶店



仮想と現実、
ひといき淹れて。

station

- VRChat : Home Cafe - MiniGreen
- cluster : まぶしい光の注ぐ場所
- NeosVR: Lotus Bay
- Real.W : 高円寺・旅する喫茶

Platform Vol.7 contents

Gravure: KTNK 浮島Cafe

.....4

Home Cafe - MiniGreen VRChat

.....12

まぶしい光の注ぐ場所 cluster

.....18

Lotus Bay NeosVR

.....24

高円寺・旅する喫茶 Real.W

.....30

あとがき

.....36

第7号のテーマは「カフェ」。

カフェというのは無数のひとりが交差する場所です。お互に話すこともなく、ただ飲み物を飲み、あるいは軽食を食べて去っていく。ちょっとだけ長いすれ違いが起きる場所です。

しかし、珈琲や紅茶の匂いが、誰かがそこにいたことを教えてくれます。メタバース上のカフェではどうでしょう。仮想の匂いがしてきませんか？誰かが、いや「何が」さっきまでここにいたのでしょうか。

そんなことを、珈琲でも飲みながら考えてみてください。

編集長

◀To the next PLATFORM.



世界には、色々な町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」





あなただけの
喫茶店





Another cup of



cute teacup.

Flower ❤



Okay, feel



Sweets!



Ocean View...
yourself at home.

またのご来店を、
心よりお待ちしています。

*We look forward to
welcoming you back.*

13

12

World: KTNK 浮島Cafe

Created by きつねこ 狐猫

Home Cafe

MiniGreen
VRChat

誰でも手軽に ホームカフェを

自宅で カフェ、あるいはバーを開きたいと思ったことはないだろうか？ 少なくとも私はそんな夢がある。

よつこそ
ホームカフェへ

直接のキッカケは、両親に連れられて、立派な家のホームパーティーに何度も行ったことだろう。子供の視点では、どこでどう仲良くなつたのかが分からなかつた、両親の友人のホームパーティーだ。

その家は、玄関を抜けるとバーカウンターがあつて、レストランのように広々としたキッチンがあつた。その家に住んでいる子供たちと、滅多にしない0時を越えた

夜更かしをして、巨大なテレビで心ゆくまでゲームを楽しんだ。自宅も同様に大騒ぎできて、レストラン以上に美味しいものを味わえる。なんて贅沢なのだろう。

やがて、一人暮らしを始めてから思ったのは、ホームパーティーとはある意味で、自営業の飲食店を開くよりも険しい道だということだ。

高収入のエリートならばいざ知らず、自宅にバー・カウンターを設置したところで、それを利用する日が年に何回あるだろうか？ それを『仕事』とするならば、疲れを癒しに来る社会人が何人かは来るだろうし、お金が稼げるならばモチベーションが高まる。しかし、せっかくの休日を、皿洗いや片付けのコストも背負つて、忙しいことで有名な日本人たちとホームパーティーを？ 割とドライな思考をしている私は歳をとるにつれて、ホームパーティーよりも外食を好みようになった。



このワールドの敷地内にはくつろげる場所がある。色々なシチュエーションで楽しもう。

写真／Tokikaze



このワールドはバーチャルでホームカフェを楽しむために様々な機材が完備されている。泡を立てたカフェラテを作ることができる。

お腹が鳴りそうのを抑えながら玄関を抜けると——ああ、カフェテーブルだ。家中では、オシャレなピアノのBGMが流れている。キッチンにはバリスタやマグカップが備わっていて、シロップやミルクだって用意されている。マグカップに飲み物を注ぐ方法を覚えれば、フレンドを呼んでもすぐ「客」と「店員」でロールプレイができるそうだ。

ワールドに入ったならば、昼下がりの空の下、小鳥の囀りが聴こえてくる。境内で囲まれた敷地には、至る所にベンチやチエアが設置されている。木造のテーブルには、焼いた肉を置くべきか、それともチョコチップスコーンを置くべきか……妄想が渦るうちに、涎が出てきてしまいそうだ。

イベントワールドではないので、初対面の人と濃密なコミュニケーションをとるのが苦手な人も安心して欲しい。ワールド名『Home Cafe - MiniGreen』、ホームパーティーならぬホームカフェを冠するからには、どんなワールドかもう想像がつくだろう。



ホームパーティー（カフェ）、そして

今回紹介するワールドは、そんなホームパーティーに打ってつけである。いや、

ところで話は変わるが、ことVRChatでは接客イベントが流行っているのはご存知だろうか？メイドのお茶会、本が読める喫茶店、ホストクラブ、キャバレークラブ等々。ほとんどは無料であり、接客する側もされる側も楽しみながら行うイベント。その意味では、「客」と「店員」に分かれて行うロールプレイングとも言える。それに、VRと言えども現実世界では自宅にいることが多いわけだから、これもホームパーティーと言えるのではないだろうか？

**Would you
like a drink?**





テラスのそばには一杯のカフェラテ。テーブルの上に置くだけで写真映えるほどキレイ。

**Home Cafe
- Mini Green**
Created by
MiniGreen417
 ACCESS
in VRChat

(文..sun)

ロールプレイについてだが、これがVRだと結構楽しい。最近はどういう訳か、ただの物書きに過ぎない私が、ベテランのVTuberや声優に教わりながら、clusterで「居酒屋CLUSTARSしたため」の店長を務めている。ちょうど夕食時に開かれる接客イベントなのだが、一緒に食事を味わうというのは、精神的にかなりポジティブな影響を与える。普段話している友人たちとも、カウンター越し、あるいはカフェチャアに共に座って話せば、意外な一面を見てくれる。個人的には、「話し手」と「聞き手」のメリハリがつ

くようになって、いつも以上に話が捲る。とまあ、このような接客イベントを開かなくとも、友人たちで「ホームカフェ」を開けば、十分に享受できると思う。自宅のような安心感と、友人と共にいる賑やかさとを、同時に味わえる贅沢を。そこに、アバターにエプロンを着けるなど一工夫すれば、VRならではの楽しみ、ロールプレイの面白さも加わるだろう。だが何よりも、友人と共に過ごすというのは、メンタル面で非常に良い体験なのだ。

何もそれは、共にコーヒーを飲む、共に夕食を味わうだけに留まらない。ワールドの動画プレーヤーを利用して、「隣」にいる友人とともに動画や配信を観る。これはかなり臨場感が高く、誰かが笑えば皆が笑ってストレス解消になるなど、良い意味での集団心理が働きやすくなる。何なら、メールだってあるしそれってある。メタバースの旅行に疲れたときは、ここに立ち寄ってのんびり過ごしてみてはいかがだろうか？



ホームカフェもいいけど リゾート気分で 楽しんで



家でパーティーを楽しむのもいいけど、外のテラスでひなたぼっこしながらグラスを一杯飲んでくつろぐことも。リゾート気分で落ち着くのもあり。

←自分で作った飲み物を持ってお気に入りの場所で写真撮影楽しもう。



写真／ヤマノケ

深夜に差し掛かりそろそろ一区切りかな、と電子煙草を吸い込みながらワールド検索画面をぼうと眺めていると一際真白のサムネイルを掲げたワールドに目を惹かれた。ワールド説明文には「カフェとモニター配置してみた」とあり、どう

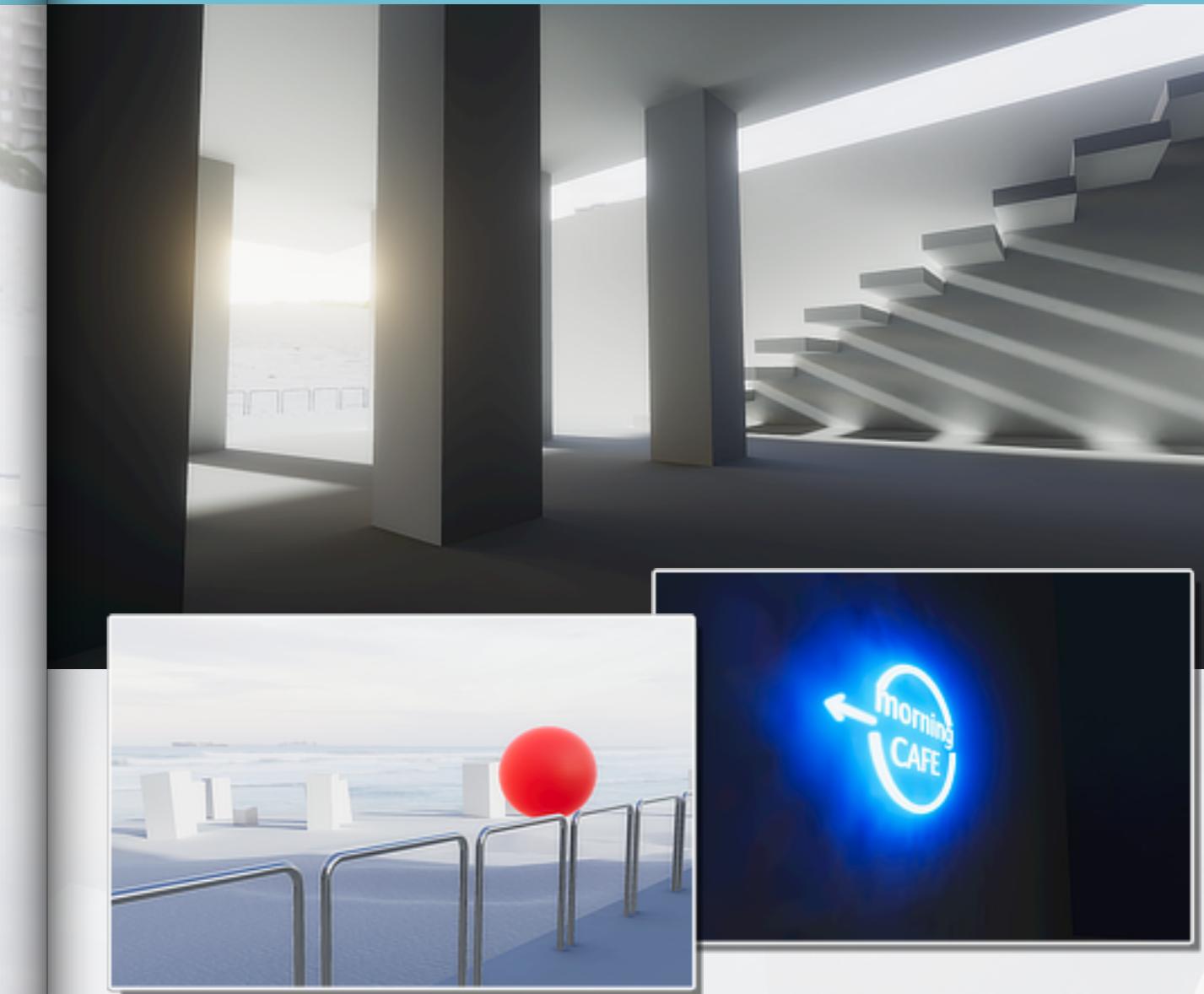
近頃は進取にカフェや喫茶店に赴くことも少なくなった。昔は漫るな心を満たすと、少しばかりの鹿島立ちかのように弾む足を店まで運び、好みの産地のコーヒーを注文して、店内に漂う香りや雰囲気を吸い込み、紫煙を熏らせながらまつたりと時間を溶かしていたものだ。それがいつしか仕事を片付けるためであったり、客先訪問前の隙間時間を埋めるためであったりと、何とも忙しない用途でしか訪れない場所となってしまっている。七月某日の夜半、デスクトップPCからclusterに潜った私は、本誌の記事を書くためというこれまたせかせかとした理由で、カフェや喫茶店を模したいくつものワールドを企画書をめくるかのように巡っていた。

を淹れる



現実世界で電子煙草を少し吸った後、ネオンサインに別れを告げて先ほど出迎えてくれたブロック階段の許へ向かった。階段へ近づくほどに、差し込む光の明度が増していく。突き当りとなる階段を横目に左手を見やると、支柱を搔き分けるように眩い白が飛び込んできた。息を飲むほどの日の光に照らされ「ああ」と、何とも情けない声を上げてしまった。その声とともに何処となく張っていた気も解けて呆然と立ち尽くしてしまった。呆気にとられて持ち出してきたウエルカムコーヒーを零しかけ（ることはバーチャルの世界なのだからまあそうなのだが）慌ててカップを持ち直していると、白の空間の

いうにはあまりにも簡素な場所ではあるが、大きく貼られた鏡や切り取られた天井から差し込む光を受けて何とも言えない存在感を放つている。金属製のコーヒーカップを一つ拝借し、等間隔に凜と並んだアルミの欄干に寄つて、赤色のモニュメントと浜辺に無秩序に突き出した真白のオブジェクトを暫く眺める。「朝だ」と、特に意図せず独り言っていた。夕陽と形容したモニュメントを前にこんなことを呟くのもおかしな話だが、手に持つコーヒーと浜辺を照らす陽の光、風が微かに肌を撫でているかのように感じるこの景色に言いようのない「朝」を想起してしまったのだ。



ここは屋内のように、左手から差し込む光に照らされ辺りの壁は少しばかり赤みを帯びているが、白を基調とした内装となっていて、モデルハウスや美術館のようなモダンな様相を呈している。振り向くと蒼白いネオンサインが薄暗い突き当りの壁に掛かっていて「モーニングカフェ」への道案内をしてくれている。「おお、では早速ウエルカムコーヒーにありつけ」と突き当たりを曲がると、薄暗い内装に切り取られた白浜の景色と、沈む夕陽のような赤を帶びた丸いモニュメントが見えてきた。不意に現れたコンテンポラリーアートに暫く目を奪われていたが、「あ、そうだコーヒー」と思い出し、左手の奥に目を遣ると瀟洒なカウンターといくつかのコーヒーカップが少しばかりの光に照らされていた。カフェと

やらカフェも併設されている場所のようだ。プライベートサーバー（ワールドへの参加を招待制とするもので、じっくり一人でワールド探索を行いたい場合に私はこの設定を良く用いている）を選択しワールドに足を踏み入れると、格子状に陰を落とす壁から突き出たブロック階段が出迎えてくれた。



一角に、パステルグリーンの歪なモニュメントが二基、光合成をするかのように朝を吸い込み、伸びをしていることに気が付いた。そこでふと我に返り「そうだ、あの階段をまだ上っていないな」と思い起こし、コーヒーを抱えてブロック階段へと向かった。

モダンなブロック階段を上り、建物の二階へ入ると再び明度を落とした支柱と白壁の通路が現れる。展望台へ向かう回廊のようなそれに沿って少しばかり歩くと、階下のフロアよりも更にひらけた、白を望む場所に辿り着いた。陽がじんわりと頬を照らし、柔らかい風が耳を撫でているように感じる。フロアの縁を見ると金属製のコーヒーカップが数個座つて陽を浴びている。「ああ、朝だ」と何だか合点がいったような気分に満たされた自分がいる。では、と私も縁に腰かけ、二杯目のコーヒーに手をかける。真白の朝を目一杯に吸い込んで私も階下のモニュメントのように暫し、光合成でもしよう。

明くる日、現実世界の私は、久々にお気に入りのレトロな喫茶店へと赴いた。伊予柑のマーマレードをいっぱいに塗ったチーズケーキを頬被り、水出し珈琲を堪能しながらこの記事の原稿を書いている。食べながら、飲みながらとまだまだ忙しないが、以前よりは幾分またたりと時間を溶かしているようを感じる。

(文・ヤマノケ)

< To the next PLATFORM.



まぶしい光の注ぐ場所 (by ニックウインター)



ACCESS



人間には二種類いる。物事の結果に意味を見出す人と、その過程に意味を見出する人だ。根っからの実用主義者の私は基本的に前者だけど、さりとて、旅の過程になんの楽しみも覚えないほど野暮でもない。目的地へ向かう電車の座席での思い出、流れる風景、たまたま出会った人々。そうした過程は結果のスペースとして時に不可分に混ざりあって匂い立ち、その思い出すべてを輝かせる。

お茶を淹れるという行為もまた、そういった類のものだと思う。喫茶という行為に何を求めるのかはその時々で変わることけれど、それが喉を潤したり体を温めたりという結果だけで語れるものでないことは説明するまでもないと思う。今日は何にしようかとその日の気分で茶葉を選び、お湯を沸かし、こぼこぼとポットへ注いで蒸らし、やがて色づいた琥珀色の液体を愛おしげにカップへ注ぐ。その過程一つ一つが、結果としての一杯のお茶と渾然一体となって、その時間を彩る。

カフェで楽しむお茶にはこうした楽しみはないけれど、代わりにカフェに来る人が「Lotus Bay」だ。

ただ、スポーツ地点となるのは温かい店内ではなく、雨の降りしきる寒々しい薄暮のバス停だ。手元には雨傘もない。歩きだせば、待つのは白磁の水路に囲まれた煉瓦造の公園だ。晴れていればさぞ気持ちいいだろうけど、暮れかけた



日と雨粒が背景では物寂しさが先立ち、
鬱蒼と茂る立木は陰鬱さを醸しだす。
あてもなく歩けば、雨音が心の芯まで
染みてきて、体まで冷えてきた気がして
くる。そんな時にふと、公園の端にぽつ
んと立つ煉瓦造りの建物にたどり着く。

 neos



写真/オージュ

誘われるよう扉をくぐると、チルなBGMが鼓膜を揺らす。シックながらどこか温かみのある内装。ゆらゆらと回る天井扇。そこはカフェ『Water Lilly』。音を立てて扉が閉まれば、いつの間にか雨音は遠く、思わずほっとため息が漏れる。

店内はゆったりとした作りで、静かに時間を過ごせそうなボックス席と僅かなカウンター席、それに奥のソファーアー席。アクアリウムには落書きの魚が踊り、店内に静かに彩りを加えている。仮想空間の常として、店内は無人だ。さしあたつてカウンター席に座ろうとしたところで、カウンター内にキッチンがあるので気づく。小物まで手抜かりなく作り込まれている。店内がどこか暖かに感じるのは、こんな隅々まで店主の気遣いが染みているからなのだろう。思わずカウンター内に入つて手に取ると、驚くことにそれはどれも「使える」品々だ。コンロ、ケトル、水道、ロースター、ポット、どれも使える。つまり、このカフェではキッチンの設備を使って、手づからお茶を淹れることができる。



まずは茶葉をひとつまみ。ロースター

へ入れて焙煎する。出来上がりを待つ間、ケトルに水を汲み、電気コンロに掛ける。ほどなくロースターが止まる。扉を開ければ、香り高く煎られた葉の香り。熱が冷めやらぬうちに、それをすり鉢に入れ、細かくすりつぶしていく。作業に集中していると、気がつけばケトルがピイイ：と笛を吹きだし、煮えた湯がくつくつ音を立てている。よしよしと茶葉をティーポットにさらさら落としたら、沸騰の余韻の残るケトルを傾け、湯をとうとうと注いでやる。



やがて茶葉の香りが溶け出し、ポットの中には琥珀色の心温まる色合いが溜まる。



きつかりカップ二杯分。心待ちにしながら注げば、茶がゆらゆら仮想の湯気を立てている。

かつて私たちは、お湯を沸かすどころか火をつけることにすら苦労した。旅にも今は何十倍も時間がかかった。それが今や、私たちはスイッチひとつで湯を沸かせる電気ケトルのように、なんでも簡単に、短時間で、便利に済ませられる。楽に結果を手に入れることができる。

けれど技術がどれほど進歩しても、私たちには過程なくして結果にはたどり着けない。そして心を真に満たしてくれるのは、結果ではなく、そこに至る過程そのものであることも少なくない。それは旅の途中で出会う事物であったり、お茶を淹れる作業であったり、あるいは一杯のお茶にたどり着くまでの雨の冷たさ、侘しさであったりする。

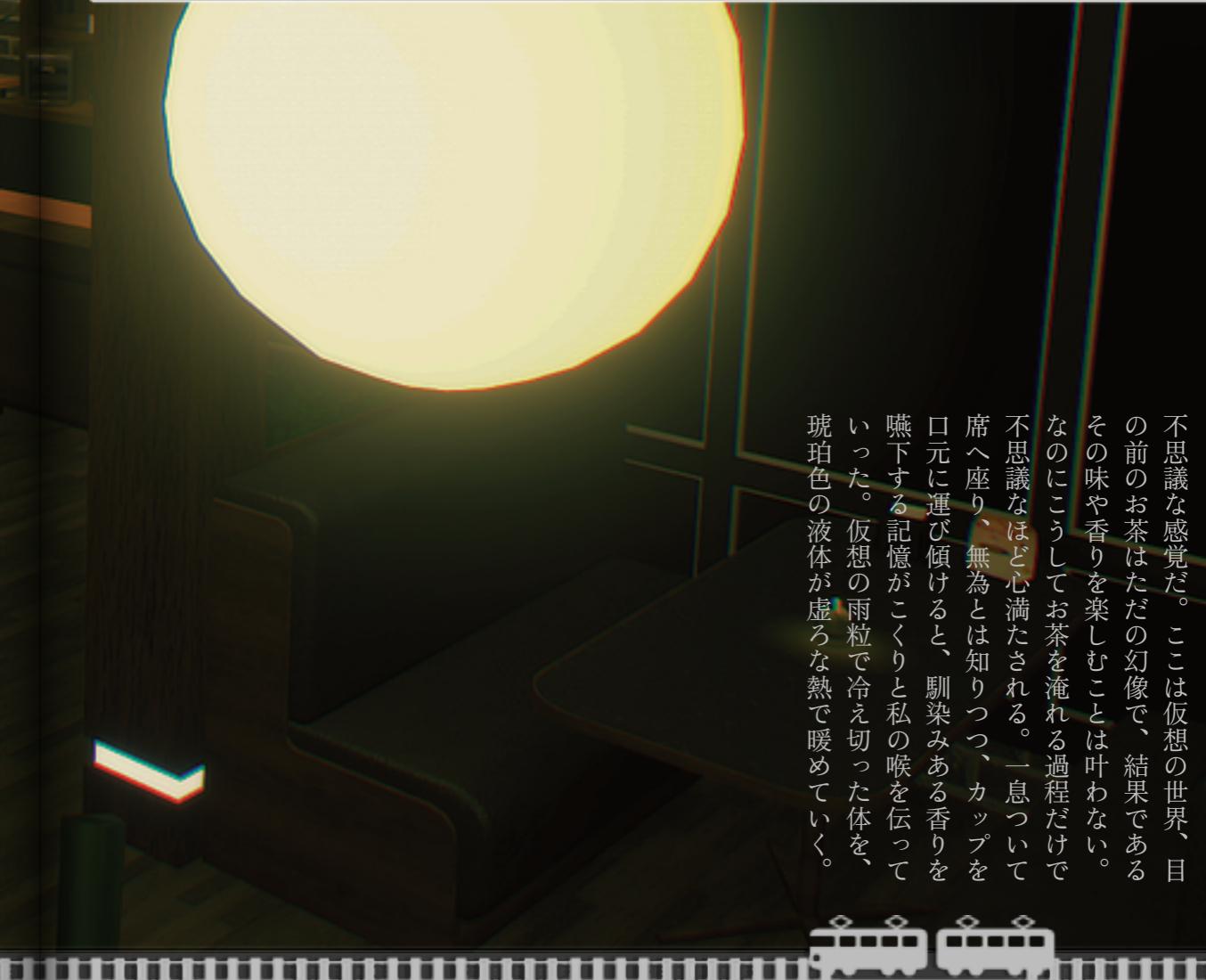
結果なき過程である仮想世界に佇む力フェ『Water Lily』。そこに物理現実の帰結としての一杯のお茶はない。けど、この店のお茶の味わいは、私たちが忘れがちな、なにか温かいものを思い出させてくれる。それはきっと、最上級のお茶にも劣らない芳醇なものだと私には思えた。

(文..思惟かね)



To the next PLATFORM.

不思議な感覚だ。ここは仮想の世界、目の前のお茶はただの幻像で、結果であるその味や香りを楽しむことは叶わない。席へ座り、無為とは知りつつ、カップを口元に運び傾けると、馴染みある香りを嚙下する記憶がこくりと私の喉を伝つていった。仮想の雨粒で冷え切った体を、琥珀色の液体が虚ろな熱で暖めていく。





東京・高円寺にある「旅する喫茶」。
「旅」をコンセプトにした喫茶店。

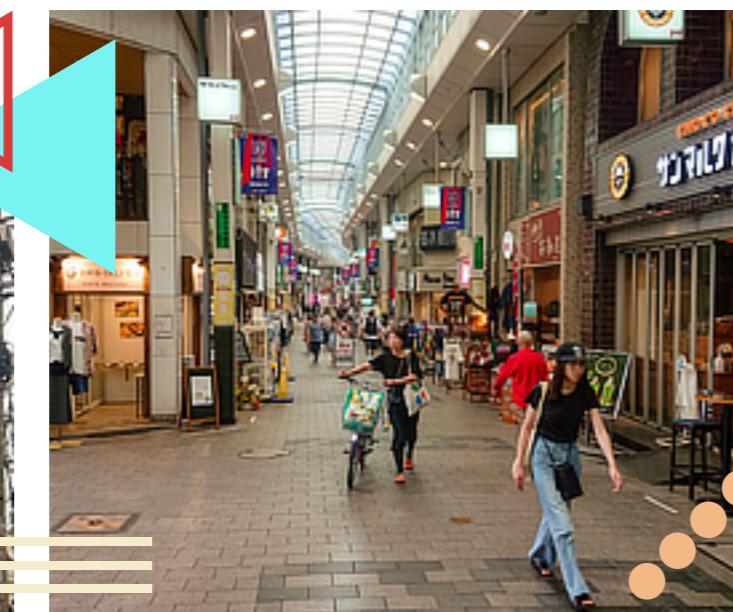


クリーミー・ソーダに 溶ける自意識

レトロでポップで可愛く、写真映えで人気のある、昭和レトロを象徴させるクリーミー・ソーダ。名店・旅する喫茶で食べに行つた時のツセイをつづりました。

基本的に、予約をしてメシを喰う、ということは「ダサい」とだと認識している。メシというのはいつもの時間になつたから食べるものと考えているし、そもそも、グルメじゃない私は、予約をして何かを食べるとしても、その味の良しあしがはっきり分からかと言われると困る。いや、そしてそれ以上に、「予約をする」ということに、なんというか、身の丈に合っていないと感じをおぼえてしまう。「予

約をする」必要がある飲食店といふことは、そこは人気店だといふことで、私なんかが行つていいのか?と内なる私がなんども聞いてくる。内なる私はこうも言う。「どうせそういう店に行くやつらなんか、「予約しちゃった!」みたいなことをインスタに書き込んで、出てきたものをせつせと写真にとつて、「めっちゃウマい!☆」みたいなこと書くんだろう?そういうのが一番ダサいんだよなあ。本当に味はわかるのかね?「有名な



右) にぎわいのある、高円寺のアーケード街。
左) メインストリートの裏通りにある、ビルの壁面。

さて、今私は高円寺にいる。手には今回取材する「旅する喫茶」の受付表。10番と書かれている。QRコードを読み込むと現在何番の人が待っているかわかる方式だ。要するに、予約する羽目になったというわけだ。あー！悔しい！

確かに今回のテーマ「喫茶店」ということで、オススメされた有名な所に行こうと思った。平日の昼間、しかもやや遅い時間帯だから大丈夫だと思った。人気店は格が違った。予約をしてメシを喰うことになった。なってしまった。というかよく考えてみれば取材なんだから、インスタに「めっちゃウマい！」って書くのよりたちが悪かった。

とはいえただ待っていても仕方ないし、高円寺を歩いて時間を潰そう。高円寺と言えば小説にもなった純情商店街だな。とりあえず、八百屋と魚屋のタイムセールが始まったので、近くの100円ショップにいって保冷バッグを買い、80円になっていたキャベツ(一玉)と500円になっていたメジマグロを買った。まあ、少しの間なら

これで大丈夫だろう。まだ時間はある。今度は純情商店街の反対側のアーケードを歩く。古着屋が多い。あいにく、ファッショングには疎い私はその良さが分からぬが、多分この輸入古着の店みたいなのはファッショング界隈では有名な店だつたりするのだろうか。

メインストリートから外れた細い裏通りには、やっぱりマニア向けな小物屋や、よくわからない看板、なんかすごい壁面のビルがある。アーケードの古着屋のおしゃれさよりこういう道のよくわからないものに惹かれるあたりに、自分の感性のズレをひしひしと感じる。こんな感性のズレた人間が、感性が大事なエッセイなんて書いてて大丈夫か？

ようやく入れた「旅する喫茶」は10席ほどの小さな店で、クリムソーダとカレーを出す店だ。メニューを見ようとしたら「本日はチキンカレーのみとなつております」と言われた。おお、ストロンガスタイル。それでは、と、チキ



アーチが目印！ にぎやかな商店街

高円寺を歩こう

店にいる自分」を主張したいんじゃないのかね？」と、内なる私の声に耳を傾け、そうだそうだ。私はそういうやつらとは違う。そういうことは、私は絶対にやらないぞ。と、決心を固めるのであった。

結局のところ、予約して食事をするということがなんなく恥ずかしく、勝手に羞恥心を感じているだけで、それを誤魔化すためにはたかも自分で決断して予約なんてダサいことをしない！と大声（無論脳内でだが）で叫んでいるだ

まあいい。とにかく、私は予約をしてもメシを喰わない！よっぽどの事でない限りは！そんなこと、言われずとも自覚していますとも。

けなのだ。世が世なら、いや、私が博学才穎、性、狷介にして自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしない人物だったら、きっと虎になるだろうほどの過剰な自意識が心の中に「内なる私」として住んでいる。自意識過剰。そんなこと、言われずとも自覚していますとも。



JR 高円寺駅

旅する喫茶

【住所】

東京都杉並区高円寺南
4-25-13 2階

【営業時間】

12:00 - 20:00

(夜喫茶営業日のみは
24:00まで)

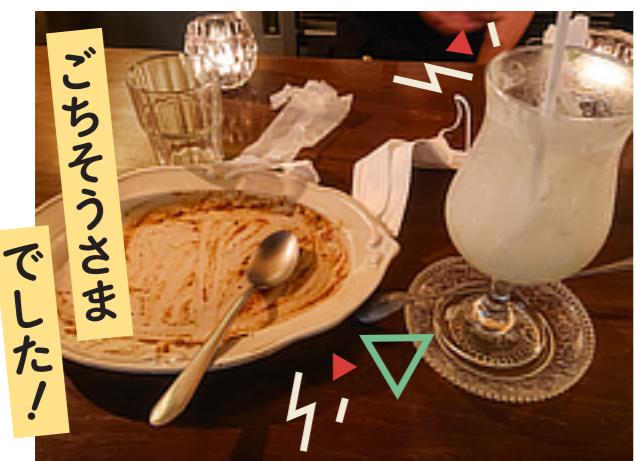
【定休日】月曜日



「旅」がコンセプトの喫茶だけに、上には旅行カバンが積まれている。

私も、クリームソーダとカレーの美味しさを前にしては無力だ。クリームソーダのアイスとともに、過剰な自意識が溶けていく…。

ふう。最後一口分のクリームソーダを飲み終え、一息つく。店を出て、駅に向かいながら考える。やつぱり、予約しないと食べられない店というのにはそれなりの理由があるんだ。おい、内なる私。たまにはこういう風においしいものを食べたっていいだろ？ 思い出に残すために写真を撮つたつていんだよ。わかったか？



(文ニツソ編集長)

内なる私は少し黙つてから「たまにはな」となげやりに言つてきた。



旅先の食材を使った 自慢のグルメ



旅するをコンセプトにし、旅先で手に入れた地方の食材を使ったカレーとクリームソーダを作つてお店に提供しています。

ンカレーと一番オーソドックスなクリームソーダを注文する。待つているあいだ店内を見渡す。薄暗いので良く見えないが、「旅」というだけあって旅行カバンが置かれていたりする。カウンター席に座っているのだが、ろうそくがつけられていて手元を照らしている内なる私がなにか言い出しそうだったから急いで口をふさぐ。

ちよっとするとクリームソーダが来た。おお、これは。クリームソーダのイデアとも呼べるような緑色とアイス、やはりついているチエリー。はやる気持ちを抑え、冷静を装って写真を撮影する。そしてストローをさし、一口飲む。

「コレ」だ。何が「コレ」かは分からぬが、このクリームソーダは確かに飲んだことがあるはずのクリームソーダだ。懐かしい、とも違う。おいしい、というだけではない。「コレ」だとしか言いうがない味がする。

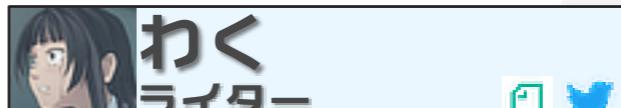
そしてようやくカレーが来た。チキンカレー。ご飯が上品に盛られているタイプ。こちらも写真を撮つてから食べ始める。辛い。し



ほっと一息つきたいときにカフェに行くのはいかがでしょうか？とはいっても最近暑いですからね、バーチャルのカフェで休んでください。ちょっと休んでいる間に季節も変わり、次の停車駅「秋」に向かいます。お手持ちの切符をなくさないように。



先日、私にご指導ご鞭撻してくださる御方の別名義を知ったのですが、私が不眠症になっていた時に聴きこんでいた安眠ASMRの声優さんでした！？人生何が起こるか分からないものですね。



未だに喫茶店のアメリカンとブレンドの味の違いが分からず、とりあえず美味そうに飲む表情だけは、年々上手くなっていく…。



珈琲OBの金魚鉢に注がれたソーダや花瓶に山盛りにされたパフェを見てから喫茶店の感覚が壊れた。



この頃は夕刻、仕事帰りに最寄かつ老舗の喫茶店でケーキをテイクアウトする人（ほぼNPC）として生きてます。
※でもNPCになれる時間も大事ですよね、多分。



正直おしゃれなカフェより、昔ながらの薄暗い喫茶店の方が落ち着くんでしょうね。ちなみに推しの喫茶店は池袋のワンダーパーラー。



私が気になった「旅する喫茶」の2号店に行ってみましたが、まだ工事中でした。事前に公式ツイッターを見てなかったのは不覚…。



ぼく、ぐあてまらがすき！



喫茶店とカフェってほんの少し前までは明確な違いがあったんですよね。僕はオシャレなカフェも薄暗くて渋い喫茶店もどちらも好きです。

STAFF	編集長 Editor Chief ニッソちゃん	執筆 Writer sun
	誌面デザイン Design 思惟かね 燕谷古雅	ヤマノケ 思惟かね ニッソちゃん
	校正 Proofreading Nag	感想 Photographer Tokikaze sun オージュ ニッソちゃん わく(裏表紙)

To the next JOURNEY.

Platform Vol.7 【あなただけの喫茶店】

発行 : Platform編集部 (platformvirtualreal@gmail.com)
一版 (2023/9/10)

2023. 9. 10

Our
Journey
Continues...

Platform

Vol. 7

あなただけの
喫茶店